

# 平安時代後期の瓦

## —六勝寺を中心とする仏教瓦等の性格について—

津々池 惣一

### 1. はじめに

いわゆる平安時代後期（含む、鎌倉期）の瓦を観るとき、瓦の文様が多種多様になることは周知のことである。六勝寺瓦を観るとき、その中に仏教関係の瓦がある。それらのもつ意味と六勝寺との関係を検討することで、当時の世相の一端を垣間見て、宗教の位置と当時の権力関係を検討することを小稿で試みようとしたものである。まず、六勝寺の瓦を中心に提示し、最近の調査成果での寺域も含めて概観する<sup>(1)</sup>。それに、文献史学の成果を概観してみる。その上で、両者を併せて検討していき、六勝寺瓦の再把握と六勝寺との関係などを抽出してみた。

### 2. 六勝寺仏教瓦の紹介

そこで、この章では平安時代後期に連続して一定地域に建立され、国家の意思が体现されているという六勝寺跡の出土瓦の紹介と検討を加えることとし、まず、各寺院ごとの特異瓦を列挙してみる。

#### 1) 法勝寺

図1の1-①～3-①は、軒丸瓦に「七」「九」「卍」などの文字・記号をいれたものである。これらは複弁八葉の蓮華文で、中房にそれぞれの文字や記号を配するものである。「塔の壇」のあった動物園内での採集遺物である。採集個体数などは明らかでない。径15cm前後の大きさである。法勝寺外でも、散見する<sup>(2)</sup>。また、「卍」瓦は法勝寺跡のほか常磐中ノ町遺跡（3-②）その

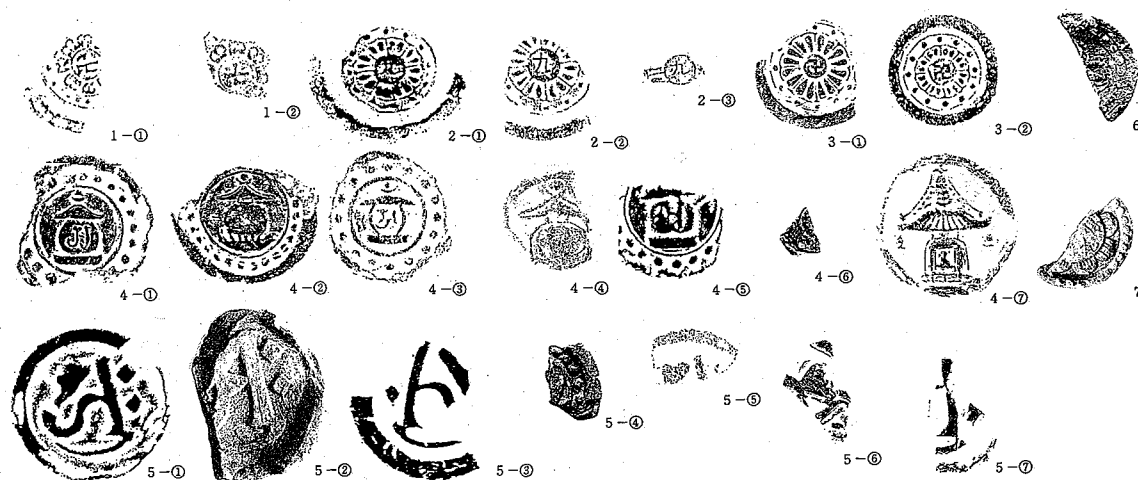


図1 六勝寺等特異軒丸瓦（1：8）

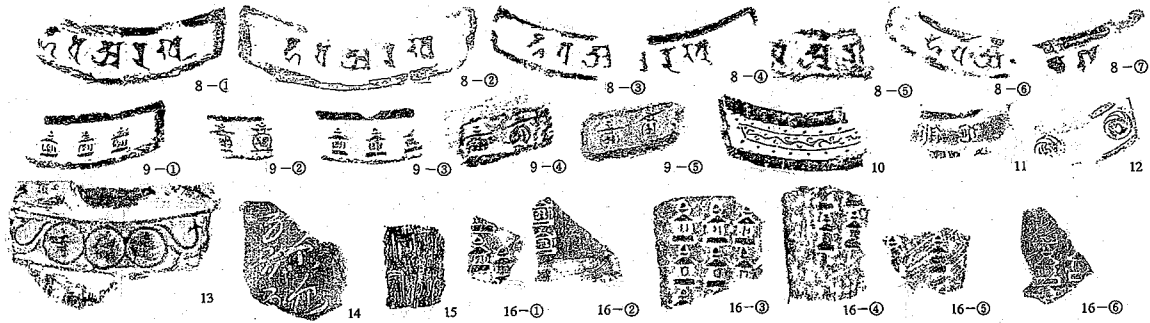


図2 六勝寺等特異軒平瓦他 (1:8)

他にも出土している。

図2-10。また、軒平瓦で、中心に「九」字を表しているものが報告されている。報告の図では判読不能であるが、取り扱うこととする。簡略化された唐草文の軒平瓦である。顎の成形は定かではないが段顎状である。戦後、米軍の施設の造成時に採集されたもので、「九」字の軒丸瓦とセットであると見られている。軒丸瓦と共に多いと報告されている<sup>(3)</sup>。「七」は七仏薬師堂を表わすという。「九」は九体阿弥陀堂に伴うものという見解と、八角九重塔に伴うものという説がある。

図2-8は軒平瓦に梵字を五文字並べたものである。成形は平瓦の凸部に別粘土を貼り付けて行なわれている。曲線の顎を持つ。8-①と⑦は木村捷三郎氏採集のものである。その他、1947年石田修一氏報告のもの(8-⑤)と、西田直二郎氏等報告のもの(8-⑥)がある。これらは「塔の壇」を含む動物園内での採集であるが、木村捷三郎氏採集のものは法勝寺内の具体的採集地点が判然としないものの、同一の場所もしくはそれに近いと思われる。同文のものは尊勝寺・円勝寺・成勝寺推定地でも出土している。中央に大日如来の梵字「ア」を置き、左右に二文字ずつ梵字を配する。

図1-5は、胎蔵界の大日如来「アーク」を表わした梵字文の軒丸瓦である。同報告の中には他に「ア」を表わしたのものもあるという。石田修一氏発表の動物園採集のもの(5-①)の他、西田直二郎氏等の報告のもの(5-②)もある。また、法勝寺北東部付近から出土のもの(5-⑤)もある。

図1-4の①~⑥は一種の五輪塔文の軒丸瓦である。そのうち法勝寺出土のものは①~⑤である。水輪に胎蔵界の大日如来を表わす「ア」の梵字をおくものと置かないもの?(不明瞭)がある。また、地輪に相当するところに蓮弁風な模様をあしらうものと、薄くて横長の基壇状のものがある。更に火輪にあたる部分の棟線が反り返るものと直線的なものがある。また、図2-9のように、同一意匠の五輪塔を五個?並べた軒平瓦もある。前者とセットをなすのであろうか。

4-①は動物園内での採集のものである。水輪が水瓶形で大きく、中に大日如来の「ア」を陽刻している。火輪の棟線は反り返る。径は15cm前後である。4-②は同じく動物園内での採集による。前者との違いは地輪に相当する部位に蓮弁状の意匠をあしらっている点である。水輪の梵字は、有無が確認できない。4-③は地輪が蓮弁状でもなく、火輪も直線的である。4-④は動物園内の第8次調査で出土したもの。火輪部は反り返っている。水輪と火輪の間に宝塔の塔身の

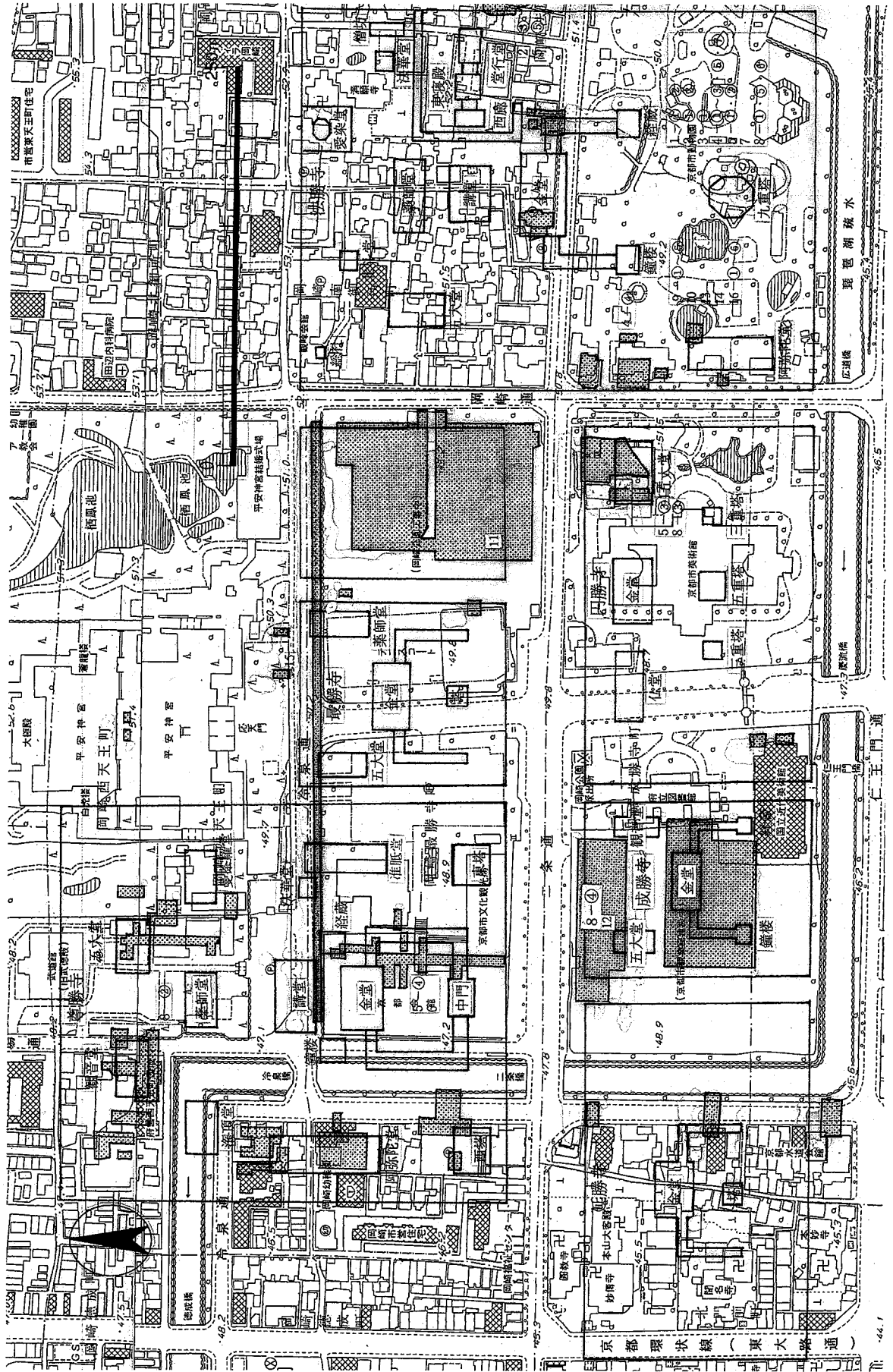


図3 六勝寺特異瓦出土地

「首」に相当する部位がある。地輪は欠損しているが、蓮弁状のものであろうか。水輪には梵字を陽刻しているかどうかは定かではない。4-⑤は、4-①に近似する。

図1-4の⑦は宝塔を描いたものである。動物園内での採集である。径15cm前後を測る。通法寺や祇園社でも同意匠のものが出土しているという<sup>(4)</sup>。

図2-16は平瓦に五輪塔文を押捺したものである。押型による陽刻である。平瓦凹面の狭端部よりに刻印している。縦に三個セットとして単数あるいは複数回刻印している。水輪の梵字は、陽刻のもの(16-①③④⑤)や陰刻のもの(16-②)、また、水輪に梵字を含まず、地輪の相当する部位に蓮弁を陰刻しているものも報告されている<sup>(5)</sup>。

図2-14は平瓦凹面に「・阿弥陀・」と読める破片である。動物園からの採集である。これは、単にこの三文字のものか、それとも、「南無阿弥陀仏」か「阿弥陀堂」なのか。石田氏採集のものには、宝塔文を刻した平瓦にそれぞれ「南」「陀仏」と書いた破片が報告され、この種の瓦を「南無阿弥陀仏」瓦とされている<sup>(6)</sup>。

図1-7は、「・勝寺」と読める軒丸瓦がある。動物園からの採集である。複弁8葉(?)である。陽刻してある。径は約12cmを測る。「法」勝寺と理解するべきか、「六」勝寺とすべきかの課題がある。

図2-13。これは「東福寺」を陽刻するものである。「東大寺」「建仁寺」を刻する瓦も報告されている。これらの瓦は鎌倉期に降るとされるものであり、六勝寺建立当初の製作的意義が鎌倉期に至ってすたれた結果、瓦の文様に政治的意味付与する意義が後退し、単なる数合わせの瓦(転用瓦)にその性格を変容させたとも考えられる。

## 2) 尊勝寺

図1-6は羯磨を描いた軒丸瓦である。尊勝寺の金堂・塔跡の発掘での出土という。径12cm前後を測る。この羯磨文瓦は同調査地出土の宝塔文、梵字文軒丸瓦と同様、一種1個体である。軒丸瓦、軒平瓦で一種で20個体を越すものは軒丸瓦で一種、軒平瓦で二種で、大半は1~3個体であるという。同文は東寺でも出土している。

図1-4-⑥は五輪塔文の軒丸瓦である。地輪に相当する部位に蓮弁をおくものであろうか。水輪に胎蔵界の大日如来「ア」を描くのかどうか不明。

図1-5-④は梵字文軒丸瓦である。胎蔵界の大日如来の「ア」を描いていると思われるが、細目不明。

図2-8-②。軒平瓦に梵字の五文字を並べるものである。梵字は、五輪塔に良く見かける「五大」を表わす種字とするならば、キャ(右端)、カ(左端)、ラ(右次)、バ(左次)、ア(中心)である。浄土教の影響を受けた真言密教系のものであるという<sup>(7)</sup>。顎部は直線に近い曲線あごである。瓦当成形は、「段顎を呈さず、平瓦部から徐々に厚みを増し瓦当部へ至る」と記載されている。同文は法勝寺、円勝寺、成勝寺から出土している。

## 3) 円勝寺

図1-5-③は梵字の軒丸瓦である。大日如来のアークを表わす。法勝寺出土の瓦をそのまま

かたどったので、逆字になっているものである。報告では判読不明の小片が他に一点あるという。

図2-9-③は梵字をあしらう軒平瓦である。同文の瓦では、一番新しそうである。顎部は緩い曲線顎である。

その他、小片であるが、五輪塔文を持つ平瓦の破片もあるという<sup>(8)</sup>。

#### 4) 成勝寺

図2-12は特殊な瓦で用途は不明であるが、鳳凰をあしらっている軒平瓦風のものである。

図2-8-④は木村捷三郎氏による採集の瓦である。勸業館跡地での採集である。成形はこれまでのものと同様に瓦当部を厚めにして箆を押している。顎はゆるやかな曲線である。成勝寺には観音堂がある。

#### 5) 最勝寺

図2-11は、「南無・・・」を表わす軒平瓦である。最勝寺の寺域より東にあたると思われるが、隣接地からの出土であるので、廃棄瓦として取り扱う。陽刻している。

図2-15は、「五大堂」を刻印した平瓦である。最勝寺推定地の北西部で出土している<sup>(9)</sup>。文献では、「五大堂」も北西部に位置している。

#### 6) 延勝寺

推定延勝寺からの瓦には該当する瓦は目下のところ、出土していない。

### 3. 伽藍配置等からうかがえる六勝寺の性格

以上、様々な瓦を観てきたが、当時の六勝寺の性格はどのようなものであったのだろうか？先学による六勝寺の伽藍配置とその性格についての知見の概略を抽出してみる<sup>(10)</sup>。

\*伽藍配置などは復古調を特徴付けるものである。規模の不明な最勝寺、延勝寺を除き、他の寺院の金堂は七間四面の裳層付きであった。薬師寺金堂などの官の大寺のそれと同一規模であること。金堂中庭の構成は中門で前庭を閉じる尊勝寺を除いて共通している。存在が確認できない成勝寺を除いて、塔の存在は伽藍配置の中で重要な位置を占めている。共通する型式を貫徹しているものは復古調である。伽藍中枢部の対称性と塔の復権。

\*密教を特徴とする。金堂に胎藏界五仏、塔に金剛界五仏を配し、両界曼荼羅の世界を表現していたとされている。諸堂宇も薬師堂や五大堂などの密教系が多く、鳥羽や白河の諸寺院の阿弥陀堂中心のそれとは趣を異にしていた。

\*法勝寺では創建当初から浄土教系の堂宇・阿弥陀堂は存在するし、また、前庭には広大な池と中島が存在する。法成寺式伽藍の系譜を引く浄土教系を示している。しかし、その後の六勝寺の他の寺院では阿弥陀堂の造営は創られたにしても時期が遅くなり、時代を降りるにしたがって半数は建てられなくなった。

\*すなわち、復古調を採用することにより奈良時代のような天皇家への復権の意思表示とその威厳の誇示を謀り、密教という宗教思想を六勝寺の至る所に表現していた。末法時代の始まりとされた1052年から、そう日が経たない法勝寺造営の時期は浄土教系の堂宇などの陣立てが必要と

されたが、時代を経るにしたがって、六勝寺は中心的な目的に向けて寺の性格を露にしていった。個人の極楽浄土への希求は鳥羽・白河の私的寺院で重きを置いて行なわれるようになった。すなわち、院政による一時の天皇家の復権を図るも経済社会制度の諸矛盾の増大や新興の武士階層の台頭により、政治の場での浄土教系の仏事を拝顔する余裕がなくなりつつある時代の到来を窺えるのではなからうか。

#### 4. 六勝寺における密教の位置

とりわけ、密教については、六勝寺の中心的性格に関わる影響力が窺えることから、六勝寺への浸透度の度合いを概観する。院権力と六勝寺の関係についての概略をまとめてみる。<sup>(11)</sup>

\*六勝寺の検校は仁和寺の御室が当たっていた。

\*その仁和寺の御室は11世紀後半、後三条天皇の時から王家出身の身内の僧侶を充てた。王家の護持僧として。

\*仁和寺は広沢流の真言密教である。白河院以降身内僧を御室として登用して血縁的關係を拠り所とした宗教権門を築いた。法親王に任じられた御室は僧綱制という僧侶身分秩序を超越した存在とされた。更に御室は孔雀経法を真言密教修法の頂点に据え、12世紀中葉以降、東寺の長者に取って換わり真言の密教修法を掌握独占したという。すなわち、真言密教の頂点に立つことになった。更に、12世紀末の御室で守覚に至ると真言・天台両宗の公家修法の秩序化を図ろうとし密教界の再編を図る。

\*ところで、六勝寺は、形式上は顕密八宗で構成されていた。しかし、最重要行事（法勝寺修正会での牛王宝印の授与。）などは、東寺長者・天台座主・南都諸宗別当を差し置いて、六勝寺の検校が、すなわち仁和寺御室が行なったという。

\*ところで、六勝寺は実質的には院権力の造営によるもの。すなわち、院権力と仁和寺御室との関係は身内同士の関係においてなされたもの。

\*したがって、六勝寺において真言密教は相当な位置を占めていたと想定できる。すなわち、天台や南都諸宗より抜きんでていた可能性が大である。

\*真言密教は院権力の政治支配のための宗教上の一大装置であったといえよう。

#### 5. 上記の文献資料を拠り所とした知見を参照にして出土瓦に検討を加えてみる。

A. 「卍」瓦。六勝寺では法勝寺で出土した。この意匠は、平安時代後期になってよく見られるようになる。そのことから、「卍」は平安時代後期においては密教を表わす建物関係に使用されたのではなからうか。現時点では、それ以上の論及はひかえたい。

B. 「七」「九」軒丸瓦。六勝寺では目下のところ法勝寺のみで出土している。「九」字をあらわす軒平瓦の存在は既に述べた。しかし、六勝寺以外では複数の出土例があるという。<sup>(12)</sup> 複数の出土例があるのはどのような性格の建物なのか。法勝寺のためにのみ製作された瓦ではなく、創建瓦かどうかは別にして法勝寺内の特定堂宇と共通の性格を持つ瓦として製作され使用されたと考

えたい。したがって「七」や「九」は特定堂宇を示すものとも考えられる。そうであれば、「七」は云われているように七仏薬師を示し、薬師堂に関連する瓦であるのか。「九」は九体阿弥陀堂か九重八角塔に伴うものか。堂宇の推定では薬師堂は寺域の北端中央に近く、「七」採集場所である動物園から離れているので課題が残る。「九」は阿弥陀堂が西南部で、九重の塔が南部中央部であるので採集地点との符号は合う。しかし、図1-2-③は寺域の東部で出土しており、断定は避けたい。九重の塔は法勝時のみで建立された。他の出土地には浄土教系の寺院が多い。このことから、九体阿弥陀堂に使用されたと想定もできる。

C. 「・勝寺」瓦。「法」勝寺銘の瓦であろう。六勝寺という総称は後代に付けられたはずである。「愚管抄」のなかに「六勝寺」の名が出るが、承久元年(1219)の著作である。また、この瓦が平安時代後期のものとしたら法勝寺建立から六番目の寺院である延勝寺の建立とは約70年の幅があり、当初から「六」勝寺銘を予定したと考えるには無理がある。

D. 「五大堂」瓦。最勝寺の北西部にあたるところでの出土である。五大堂の推定地に極く近い。文献資料を裏付ける資料である。法勝寺でも出土例があるというが、文献資料では五大堂があったとされている。

E. 「南無」瓦。「南無阿弥陀仏」銘の文字瓦であろう。最勝寺の南端部に近い東隣接地であり、最勝寺の瓦としたら、阿弥陀堂などは造られなかったとされているが<sup>(14)</sup>浄土教系の建物があった可能性もある。兵庫県小野市の浄土寺にも報告されているが、特定堂宇への使用を如実に示すものである。

F. 「・阿弥陀・」瓦。「阿弥陀堂」銘なのか、「南無阿弥陀仏」銘なのか、はたまた、「阿弥陀」のみであったのか。いずれにしても、浄土教を示す瓦である。採集地点が動物園であるから、寺域の西南にある阿弥陀堂に近い。常行堂も浄土教系の堂宇であるが、寺域の北東部に推定されており異なるものとする。石田修一氏の破片収集から南無阿弥陀仏とみるべきであろう。

G. 梵字軒平瓦。法勝寺、尊勝寺、円勝寺、成勝寺から出土している。法勝寺の石田氏採集のものは塔の壇とその周辺、すなわち動物園内である。五輪塔そのものが浄土教の影響を受けて出現したものであるという論に依拠して、真言密教系であるが浄土教系の瓦として扱う。尊勝寺での出土は推定観音堂からである。円勝寺のそれは寺域の北東部からである。この浄土教系瓦が特定堂宇に葺かれたとしたら、観音堂や阿弥陀堂であろうか。法勝寺は上述したように阿弥陀堂がある。成勝寺は観音堂がある。円勝寺には良く分からないが六時堂があったという<sup>(17)</sup>。

H. 梵字文軒丸瓦。法勝寺、円勝寺から出土している。胎蔵界の大日如来を表わしている。塔を金剛界、金堂を胎蔵界と見立てていると言われているので、塔跡付近であれば、金剛界の大日如来を想定するが、西田氏がいう大毘盧遮那仏とされていた法勝寺であれば、一考を要することになるのか。

I. 宝塔文瓦。宝塔のものと五輪塔状のものがあることは既に述べた。埋経の習慣が平安時代後期になると浄土教の盛行につれて盛んになった。それは、釈迦入滅の五十六億七千年後に弥勒が現れるときまで経文を保管する目的であった。顕教からの埋経は宝塔で行なわれていたという。

それに対して密教も浄土教系の影響で埋経を行なうようになったという。五輪塔が密教系での埋納具であるという。そして、法勝寺出土の軒丸瓦・軒平瓦に見られる五輪塔瓦は宝塔と五輪塔の中間型をしており、五輪塔の初期的形態のものであるという<sup>(18)</sup>。すなわち、空・風輪は五輪塔のそれと同じであるが、地輪が多宝塔と同じく台状をなしていること。水輪は他の輪に比べて大きく舍利瓶形で、火輪には四隅に降棟形を付けて宝塔を表わしている。平瓦には所謂五輪塔を刻したものがあがるが、このように「合の子」＝過渡的形態のものでされている瓦文様がある。

J. 法具文。尊勝寺から出土したものは羯磨文の軒丸瓦である。羯磨は密教修法の道具であり、そのことを表現した瓦である。六波羅蜜寺や東寺に類品がある。尊勝寺のものは金堂もしくは東塔推定地付近から出土のものであり、法具瓦の性格と符合する。

K. 鳳凰瓦。成勝寺隣接地からの出土である。豊楽殿などで出土の鴟尾に鳳凰をあしらっているので、かならずしも堂宇の性格を限定できない。平等院鳳凰堂（阿弥陀堂）に伴う鳳凰もあるので平安時代後期という時期を考えれば、浄土教系の堂宇を想定したいところである。

## 6. まとめにかえて

①まず、密教系瓦の出土状態は中心的寺院や堂宇の性格を表わすものであろうか？そういった地点に多いとすれば、その傍証となる。現段階では法勝寺に多いといえる。尊勝寺内では金堂もしくは東塔付近で若干出土している。他の推定堂宇では密教系瓦はほとんど検出されていない。その他の寺院では、極少なく、出土地点などが不明瞭である。

まとめると、以下のような知見を得られる

- A. 密教系瓦は六勝寺のほとんどの寺で出土している。
- B. 特に、法勝寺では密教瓦が多い。筆頭寺院故にか？最初の寺院故に院政権の意志を体现する必要があったとも、考えられる。
- C. また、法勝寺の寺域の南部域で多い。八角九重塔が法勝寺の象徴であることを意識しているのだろうか？

②次に、浄土教系の瓦は、阿弥陀堂などの特定堂宇に見られるのか？それとも、脈絡はないのか？

五輪塔の文字によく使用されている梵字で「五大」を表す種子を配した軒平瓦は、尊勝寺については、観音堂跡のみである。他の三寺では出土場所は不明である。特定堂宇からのものとしたら、法勝寺には阿弥陀堂があり、成勝寺には観音堂があり、浄土教系堂宇に関連するものの可能性が極めて高いといえる。また、円勝寺については詳細不明であるが、六時堂が存在したという。

- A. 浄土教系瓦は尊勝寺では観音堂推定地からのみ出土している。
- B. その他の寺院では出土地を特定できないものが多いが、浄土教系堂宇の存在を想定できるものがある。「南無・」銘軒平瓦、「阿弥陀・」銘平瓦、「九」字軒丸瓦などもその証と思える。
- C. 浄土教系堂宇は六勝寺のうち後発建立の寺院には建てられなくなったという。したがって、新しい瓦にも少なくなる傾向が考えられる。法勝寺や尊勝寺などには相対的に多い可能性もある



が、その他の後発建立の寺院では存在するとしても、極少なくなるものと予想できる。また、法勝寺などでも補修瓦には少ないものと考えられる。

③さらに、両種類の瓦の数量比確についてまとめてみる。

A. 密教と浄土教では種類と数量においても、圧倒的に密教系瓦が多い。

B. 法勝寺、とりわけ金堂・九重の塔などを中心に、密教系瓦は多くの堂宇に使用されたようだ。

C. 逆に、浄土教系堂宇で密教系瓦の出土例がない、もしくは少ないとすれば、両者の使用区分は明瞭であったといえる。堂宇に対応した出土傾向を示すことになる。すなわち、現段階では堂宇の特定されている尊勝寺観音堂などの浄土教系の堂宇から、独特な密教系の瓦が出土していないことから、浄土教系瓦は同系統の堂宇にのみ使用されたと考えることもできる。

④そして、復古調瓦は南都系瓦に多い。すなわち瓦にも復古調を体現させた。六勝寺のみに使用されている瓦ではないが、六勝寺の造営方針にも沿ったものであることを示している。南都系の瓦が比較的多いのは、六勝寺関係の荘園が存在し、文字瓦などの特定の瓦の供給などに指示を出しやすかったと考えられる。

⑤以上のように、瓦にも六勝寺建立の目的を表現していることが見えてきた。すなわち六勝寺瓦は、院権力の建築物に伴うものとして宗教・政治面での自己表現の一つである。

A. 復古調は、院権力という形での天皇家による貴族からの奪権の威示行為を示すものでもある。

B. 当時、真言密教は南都六宗や天台を凌駕し、院権力支配のための主導的宗教支配装置として利用された。

C. 浄土教系建物や瓦は白河上皇など院権力の私的利益、すなわち極楽浄土を来世ばかりでなく、現世でも体現せんとする欲求と世界観を示したものであろう。それを「国王の氏寺」に持ち込んだということである。

以上、六勝寺を中心に特異な文様瓦と堂宇との関係を見てきた。しかし、現段階では、類推の域をでないものが多い。また、それ故、今後の調査事例を待つて再度論を深めたい。

尚、この本稿を書くにあたって以下のの方々からの多大な御教示を得てお世話になった。梶川敏夫（京都市埋蔵文化財センター）、植山茂（京都府平安博物館）、児玉義隆（種知院大学）、横内裕人（東大寺図書館）、当研究所の桜井みどり、布川豊治、吉村正親、上村和直、平方幸雄、辻裕司、鈴木廣司氏をはじめその他多くの方々のお世話になりました。記して感謝致します。

#### 註

(1) 六勝寺の寺域推定地については、京都市埋蔵文化財センターの復元図をベースとして、若干の修正を加えた。

(2) 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究13・14』（財）元興寺文化財研究所 1978年

(3) 石田修一「法勝寺瓦に就いて」『日本史研究 第4号』 日本史研究会 1947年

- (4) 稲垣晋也「古代の瓦」『日本の美術66』 至文堂  
近藤喬一 『瓦からみた平安京』 教育社歴史新書 1985年
- (5) 西田直二郎他「法勝寺遺跡」『京都府史跡勝地調査報告書 第6冊』 1925年
- (6) (3) に同じ
- (7) 藪田喜一郎「統五輪塔の起源」『宝ギョウ印塔の起源・統五輪塔の起源』 絵芸社 1966年
- (8) (3) に同じ
- (9) 梶川敏夫他「尊勝寺推定地第三次発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告』1976-II 京都市文化  
観光局文化財保護課 1977年
- (10) 清水広「六勝寺の伽藍とその性格」『平安時代仏教建築史の研究』 中央公論美術出版 1993年 \*こ  
の章ではこの文献に依拠して論を進め、筆者の責任でまとめた。
- (11) 横内裕人「仁和寺御室考」『史林79巻4号』 1996年 \*この章は横内氏の論に依拠して、筆者の責任  
でまとめた。
- (12) (2) に同じ \*綴喜郡田辺町三山木廃寺、奈良東大寺、興福寺の例を挙げられている。これらの寺の  
平安時代後期における宗派について知見をもたない。可能性としてそれぞれの文字瓦に沿った堂宇の  
存在の可能性を伺いたい。
- (13) 高橋健自 「古瓦に現れたる文字」『考古学雑誌第五巻第12号』 1915年
- (14) (10) に同じ
- (15) 上原真人「瓦を読む」『歴史発掘11』 講談社 1997年
- (16) (3) に同じ。「文字瓦」の紹介において、平瓦裏面に「南」の一字と「陀佛」二字の破片の存在をさ  
れている。
- (17) (10) に同じ
- (18) (7) に同じ

#### 図版出典一覧

##### 一 図版 1 -

- 1-① 石田修一「法勝寺瓦に就いて」『日本史研究4号』 1947年
- 1-② 西田直二郎他「法勝寺跡」『京都府史跡勝地調査会報告第6冊』 京都府編 1925年
- 2-① 1-①に同じ
- 2-② 1-②に同じ
- 2-③ 辻裕司「法勝寺」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所  
1984年
- 3-① 1-②に同じ
- 3-② 鈴木広司他「常磐仲ノ町集落遺跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅲ』 (財)  
京都市埋蔵文化財研究所 1978年
- 4-① 近藤喬一「瓦からみた平安京」『教育社歴史新書40』 1985年
- 4-② 同上
- 4-③ 1-②に同じ
- 4-④ 平方幸雄「法勝寺跡」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所

1991年

- 4-⑤ 1-①に同じ
- 4-⑥ 杉山信三他「尊勝寺跡発掘調査報告」『奈良国立文化財研究所学報第10冊』 奈良国立文化財研究所 1961年
- 4-⑦ 1-②に同じ
- 5-① 1-①に同じ
- 5-② 1-②に同じ
- 5-③ 福山敏男他「円勝寺の発掘調査」『仏教芸術第84号』 毎日新聞社 1973年
- 5-④ 4-⑥に同じ
- 5-⑤ 2-③に同じ
- 5-⑥ 「木村捷三郎収集瓦図録」 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 5-⑦ 同上
- 6- 4-⑥に同じ
- 7- 1-②に同じ
- 一図版2-
- 8-① 5-⑥に同じ
- 8-② 森下衛他「尊勝寺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報第23冊』 1987年 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 8-③ 5-⑥に同じ
- 8-④ 同上
- 8-⑤ 1-①に同じ
- 8-⑥ 1-②に同じ
- 8-⑦ 5-⑥に同じ
- 9-① 同上
- 9-② 同上
- 9-③ 同上
- 9-④ 1-①に同じ
- 9-⑤ 関野貞「日本古瓦文様史」『日本の建築と芸術』 岩波書店 1940年
- 10- 1-②に同じ
- 11- 丸川義広他「最勝寺・岡崎遺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 12- 網伸也他「成勝寺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 13- 1-②に同じ
- 14- 1-②に同じ
- 15- 梶川敏夫他「尊勝寺推定地第三次発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告』1976-II 京都市文化観光局文化財保護課 1977年
- 16-① 5-⑥に同じ
- 16-② 同上

16-③ 同上

16-④ 同上

16-⑤ 同上

16-⑥ 長谷川行孝「法勝寺跡」『京都市遺跡試掘調査概要』 京都市文化観光局 1994年